

V 日本海沿岸における常緑広葉樹林の北限

および隣接群落について

1. 常緑広葉樹林の北限と隣接群落

新潟県、山形県、秋田県の海岸線に残されている常緑広葉樹林は、日本海沿岸における常緑広葉樹林の北限とされる。ヤブコウジースダジイ群集、イノデータブ群集、ウラジロガン群落、及び海岸風衝断崖地に生育するヤブツバキ優占群落やマルバノシャリンバイ優占群落などの風衝低木林のおよその北限域とされる。

1) ヤブコウジースダジイ群集

ヤブコウジースダジイ群集は新潟県佐渡島の椎泊が北限とされていたが（吉岡 1964）、1974年7月の調査では椎泊付近では自然の林分はみられず、屋敷林として植栽され大きく生長したスダジイ林がみとめられた。新潟県の本州ぞいも含め、新潟県がおよその北限と考えられる。北限付近のスダジイ林の立地は、第三紀層を基盤とし、表層土が堆積した、イノデータブ群集の立地に比較的類似している。しかしイノデータブ群集よりも表層土の堆積は少なく比較的乾燥している。表日本では福島県双葉郡久ノ浜といわれているが、現在伐採され残されていない。したがっておよそ北緯37度付近がヤブコウジースダジイ群集の北限と考えられる。さらに表日本では砂丘上の砂の動きがない立地で腐植土を有する地域にもヤブコウジースダジイ群集の生育がみられる。

佐渡島以外の本土側では西山町御島石部神社に老木を主とするスダジイ林（ヤブコウジースダジイ群集）が残されている。高木層にスダジイが密閉し、低木層にスダジイ、ヒサカキ、ヤブツバキ、シロダモ、アオキなどの常緑低木が、草本層にベニシダ、ヤブコウジ、テイカカズラ、ヤブラン、キヅタなどヤブツバキクラスの草本層構成種がみられる。しかし、亜高木層にネムノキ、フジ、低木層にエゴノキ、ヤマウルシ、コシアブラ、ムラサキシキブ他の落葉低木が、草本層にツタウルシ、ツユクサ、ヘクソカズラ、サルトリイバラ、ヌスビトハギ、コチヂミザサ他多くの林縁植物が混入し、林内がきわめて荒らされていることが示される。

スダジイ優占林は、さらに秋田県本庄市馬場にみられるが、ここでは植栽され、見事な神社林が形成されているにすぎない（藤原未発表資料）。しかし、ヤブツバキ、ヤブコウジ、ジャノヒゲなど常緑植物をもっており、北限域では植栽により常緑広葉樹による森林を形成することができると証明される。

西山町御島石部神社は、自然林としてのヤブコウジースダジイ群集の北限地である。したがって厳重な保護・保全が必要である。できるだけ林内の立入りを禁止することが第一条件とされる。

2) イノデータブ群集

イノデータブ群集は北限は秋田県仁賀保村の江戸時代まで島であった地域の東斜面にみられる。最近では本荘市にみつけられた(藤原1979)。植物社会学的立場からは秋田県でとどまるが、さらに岩手県岩崎村ではブナ林構成種との混生林がみられる。日本海側は冬季の積雪量が多い為、表日本よりも土壌の保水量、空気中の湿度が高いと考えられる。したがって林床に生育する羊歯植物も北限地域では比較的多い。表日本では岩手県三陸海岸の山田湾に北限がみられるが、風衝地タイプの形態を示し、林床にヤブツバキがきわめて優占し、羊歯植物は少ない。

新潟県下ではイノデータブ群集は、第三紀層や古成層を基盤として表層土形成が良好な海からの風背地に生育しているが、秋田県では一ヶ所凹状地の砂層土に約20cmの表層土が堆積した地域にイノデータブ群集の成立がみられた。表日本側においては砂層土上では生育がみられていない。山形県では鳥海山の熔岩流上に多くのイノデータブ群集の林分をみることができる。

イノデータブ群集は北限地域では風陰地でさらに南から南西斜面に群落を形成しやすい。常緑広葉樹林の分布、とくに最北部まで分布するイノデータブ群集は、平1978は最寒月平均気温は0.5℃付近、寒さの指数は-12℃付近で限界をつくっているとしている。吉岡1956は1月平均気温1℃の等値線とほぼ一致するのを認めているが、前述の地形条件により場所により異なる。したがっておよそ1℃の等値線と一致するようである。

イノデータブ群集は、新潟県内の北限にあたる山北町勝木では、海岸風衝地にエゾイタヤーンナノキ林(オニウコギーエゾイタヤ群落)と接し風背地側に分布している。山形県、秋田県ともにきわめて類似した分布を示している(藤原1979)。

3) ウラジロガシ群落及びアカガシ群落

一般にウラジロガシ、アカガシを高木層に主体にし、ハイイヌガヤ、チャボガヤ、ヒメアオキなど日本海型ブナ林の低木層構成種をもったカシ林はヒメアオキウラジロガシ群集としてまとめられている(佐々木1949)。

新潟県ではきわめて断片的で越後南部と佐渡でアカガシ優占林が、越後中～北部でウラジロガシ優占林が分布している。越後南部のアカガシ林、ウラジロガシ林は、ヤブツバキクラスの構成種を多くもち、ヒメアオキ、ハイイヌガヤを伴う。越後中～北部のウラジロガシ林はヤブツバキクラスの構成種のうちヒサカキ、ベニシダ、ヤブコウジなど北限域に分布する種に限られ、低木層にブナ林構成種のユキツバキを優占する(p.33)。またケヤキを高木層に混生する。

4) マルバノシャリンバイ群落及びヤブツバキ群落

新潟県では常緑広葉樹の低木による風衝低木林は比較的数量少なく、佐渡島及び、柏崎市にみとめられただけである。またこれらはマルバノシャリンバイが被度5と優占したマッキー状の低木林を形成し、岩棚にはりつくように発達している。マルバノシャリンバイ群落は山形県三畝付近を

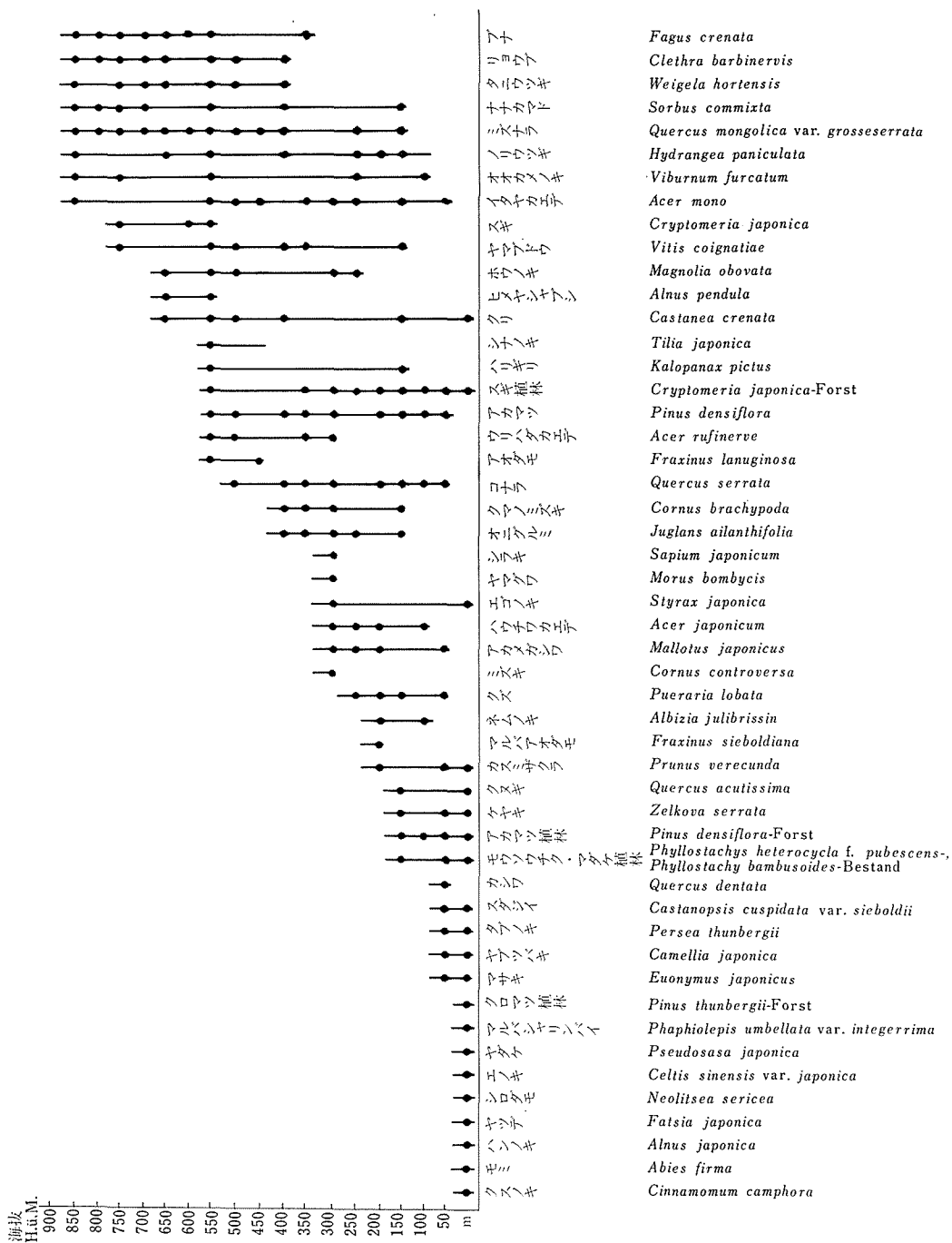


Fig. 28 主要植物の垂直分布 (佐渡ヶ島)
 Vertikale Verbreitung der wichtigsten Pflanzen auf den Insel Sado.

北限とし、以北にはヤブツバキ優占低木林が分布している。ヤブツバキ群落は、さらに福井県敦賀湾沿岸においてもみられるが（宮脇，藤原 1976），富山県，新潟県，山形県では現在のところまだ報告がなく筆者等もみとめられなかった。

マルバノシャリンバイ群落はきわめて特殊で新潟県，山形県で見られる。同様の風衝低木林ではカシワ群落がみとめられるがカシワ群落は砂層基盤の風衝地に発達している。常緑低木林と異なり新潟県では南限付近にあたり，種組成的には，カシワのみが特徴種で，林床に海岸風衝スキ草原の構成種をもっている。

2. 大佐渡主要樹種の垂直分布

相川町から大佐渡スカイラインを経で両津市に至る道路沿いの主な現存植物の垂直分布を記録した。スダジイ，タブノキなど常緑広葉樹の上限は海拔 100m，ブナの下限は 350m である。ヤブツバキクラスの植物の中で最も上部に達しているものは，アカメガシワで，ブナの下限と同じ 350m である。

スダジイ，タブノキとブナとの間 200m は主としてコナラ，アカマツ，スギ植林によって被われているが，自然状態ではおよそ海拔 200m 付近を境界として常緑広葉樹林と落葉広葉樹林が接していたのではないかと想定される。